

2012年度 中央大学共同研究費 一研究報告書一

研究代表者	所属機関	文学部		2012年度助成額
	氏名	石村 広		2,182 (千円)
	NAME	Hiroshi Ishimura		
研究 課題名	和文	漢語諸方言の動詞連続構文研究 —結果構文を中心に—		研究 期間 2012年度 ～2014年度
	英文	A study of serial verb constructions in the Chinese languages : Particular focus on the resultative expressions		

1. 研究組織

	研究代表者及び研究分担者		役割分担	備考
	氏名	所属機関/部局/職		
1	石村 広	中央大学・文学部・教授	広東語・タイ系少数民族語の調査と地理的分布に関する共時的研究	研究代表者
2	遠藤 雅裕	中央大学・法学部・教授	福建・台湾地域の方言調査および文献資料収集	研究分担者
3	千葉 謙悟	中央大学・経済学部・准教授	上海地域の方言調査と歴史文献を用いた通時的研究	研究分担者
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
合計		3 名		

2. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 1000 字程度、英文 100word 程度）

（和文）

現代中国語の「動詞＋結果補語」構造については、複合動詞とする立場と複合述語フレーズとする立場で意見が分かれている。かつて石村は、当該構造について分析し、これを統語的に形成される「動詞連続」と見なすのが妥当であると主張した。目的語がある場合、北京官話では複合形式、東南アジアのタイ語では分離形式となる。そして、このことを基に「両者の中間に存する南方漢語が2つの形式を併せ持つとすれば、これらは決して離散的に存在するのではなく、北から南まで地理的連続性によって捉える事が出来る」という予測を立てた。

石村は、自身が提示した動詞連続に関する上記の予測に基づき、中日両語の結果表現の比較・対照と二重使役の意味構造を持つ特殊な結果構文に関する分析および呉方言に関する予備調査を行った。現地で行った活動は、次のとおりである。

（1）北京日本学研究中心（北京市）：2013年2月2日～6日

当センターが開発した中日対訳コーパス・データベースおよびその使用权を得た。また、日本語結果構文との対応関係について調査した。

（2）復旦大学（上海市）：2013年3月27日～31日

復旦大学の研究会に参加するとともに、呉方言に関するインフォーマント調査を行った。共通語の普及により呉方言の本来的な言い回しが急速に失われつつあることを確認した。

漢語方言学の角度から、遠藤は台湾と中国の客家語を調査・分析した。現地で行った調査活動は、次のとおりである。

（1）陸河客家語予備調査（広東省惠州市）：2012年9月1日～9月3日

広東省陸河県の客家語インフォーマントによる音韻体系の初歩的な記述を行なった。この調査によって、陸河客家語の音韻体系が海陸客家語に近いことが明らかになった。

（2）海陸客家語再調査（台湾新竹県竹北市）：2013年3月3日～3月9日

海陸客家語インフォーマントによる文法調査を行った。所謂「処置式」を用いた結果構文およびモダリティ標識「有」について分析した。

歴史文献と言語接触の角度から、千葉は初年度、語誌研究に注力した。まず、「六合叢談」「中西聞見録」「遐邇貫珍」「東西洋考毎月統記伝」など歴史的文献のデータベースを購入した。これらは19世紀中国で発行された報刊として著名であり、当時の翻訳語の用例を検索する上で重要な工具である。このデータベースを活用して行ったのが、近代東アジアにおける翻訳語の「奇蹟」に関する研究である。この語は miracle の翻訳語として、漢字文化圏諸言語に共通して認められる。その創造の過程および定着の過程が言語ごとにどう異なるのか、そして言語間の交流はいかなるものであったかについて解明を試みた。

以上の研究活動の成果は、学部および大学院の中国語学関連の授業で紹介する予定である。なお、内部で調整した結果、担当者の調査対象言語に一部変更があったことを付言しておく。

（英文）

Our project aims to examine the relation between the syntactic form and the semantic structure of the verb-resultative complement construction (in brief, VR) indicating causative meaning in Mandarin and some dialects such as Wu, Hakka, Min and Yue. Different from the traditional framework of Chinese grammar, we suppose that the VR is a serial verb construction, which is characteristic of the so-called 'isolating language' like Thai and Vietnamese. It is worth mentioning that there is a continuum between Mandarin and these south-east languages geographically. In the first year of this project, we mainly researched the VR construction in Beijing (Mandarin), Wu and Hakka dialects in order to demonstrate the above supposition, and also observed some phenomena of language contact from a historical viewpoint.

3. おもな発表論文等（予定を含む）

【学術論文】（著者名、論文題目、誌名、査読の有無、巻号、頁、発行年月）

1. 石村広、致事类动结式的形成机制和派生动因、『中国語文法研究』（査読有り）、京都：朋友書店、105-121 頁、2012 年 6 月 15 日発行。
2. 遠藤雅裕「台湾海陸客語的動結述補結構」、『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』、東京：好文出版、320-331 頁。2013 年 3 月 15 日発行。

【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）

1. 遠藤雅裕、「台湾海陸客語的「有+V」」、國際中國語言學學會(IACL)第 20 屆年會、香港・香港理工大学、2012年 8月30日。
2. 千葉謙悟、「聖なる「しるし」の表し方：近代東アジアにおける「奇蹟」」、国際シンポジウム「越境する近代語：日本・中国・韓国」、韓国・高麗大学、2013年3月24日。

【図 書】（著者名、出版社名、書名、刊行年）

【その他】（知的財産権、ニュースリリース等）